

自然体験活動 安全対策マニュアル【指導者必携】

自然体験活動における安全の確保

自然体験活動では、危険を予知し、状況の変化に的確に対処し、必要があれば回避して、体験活動の目的を安全に達成することが大切です。その活動の実施にあたっては、施設側と利用者の最大の努力によって安全を確保し、その基盤の上に初めて冒険的・挑戦的活動や教育的効果が成り立っています。

活動の実施における安全・健康指導

本施設における生活や活動が安全かつ効果的に行われるよう、引率指導者の方は下記の点について安全や健康に関する指導をお願いします。

①事前の安全指導

- ア 所員と引率指導者による打ち合わせ及び利用者による活動コースの事前踏査（下見）と危険箇所等の把握。
- イ 無理のない活動コースの選択とゆとりある活動計画の立案
- ウ 事故やけがに備えた連絡体制、避難ルート、病院への搬送方法等の検討
- エ 活動内容に応じた、引率指導者の配置と役割分担
- オ 特別に配慮を要する成員に対する個別の指導体制

②活動中の安全指導

- ア 成員の人員点呼及び安否確認
- イ 気象条件の変化を踏まえての活動時間や予定ルートの短縮（変更）・打ち切り・避難方法
- ウ 体力、健康状態、体調不良者（けが含む）の確認と把握
- エ 班活動における、緊急時以外のグループが離散しないことの徹底
- オ 自然条件の変化に対応できる服装や準備（野外活動では季節を問わず、長そで・長ズボン・帽子・軍手・首にタオルまたはネックウォーマーの着用が基本）

③健康指導

- ア 入所の1週間前からの健康観察（提出の必要なし）
- イ 成員個々の病歴の把握。特にてんかん、喘息、アレルギー（食物アレルギー含む）等
- ウ 内服薬や薬剤等、常備薬の持参
- エ 健康状態及び排便状況の確認
- オ 万が一の受診に備えた、保護者への連絡方法の確認
- カ 入所前に体調を崩した成員の把握（症状によっては医師の参加許可を確認）

○気象情報と気象の変化

気象情報による活動(入所)の中止・変更・短縮等の原則

- ①台風通過前後、地震発生後については、その状況によって活動(入所)を中止します。
※特に台風通過後については、少年自然の家とその周辺エリアの安全確認ができるまでは入所の中止、延期等になります。入所についての確認後、来所します。
- ②警報発表時(浜松南部・浜松北部)については、その状況によって活動を中止します。
※記録的短時間大雨情報・土砂災害警戒情報発表時も同様とします。
- ③注意報発表時あるいはその他の状況については、所員(必要に応じて引率指導者を含む)の現地確認及び気象の悪化等の状況および予測を総合的に判断します。
※利用者の安全を最優先し、所員と引率指導者との情報交換や協議・相談を確実にを行います。

雷への対応・局地的大雨への対応

- ①雷鳴が聞こえたら、すぐ避難 ⇒ 屋根のある建物や家屋等へ避難します。
※活動エリアの地図で、避難場所を確認しておきます。
 - ・雷鳴が遠くても、雷雲はすぐに近づいてきます。
 - ・避難する前に雷が近くにきたら、むやみに動かず通り過ぎるのを待ちます。
 - ・近くに避難する場所がない場合は、姿勢を低くします。
 - ・雨宿りで木の下に入るのは危険です。
 - ・周囲が開けた場所や高い場所は危険です。
 - ・側撃雷の恐れがあるので、木や電柱から4m以上離れます。
 - ・大勢いたら、かたまらずにできるだけ離れます。
 - ・身に付けている金属類は、外します。※山の中で雷雲の接近を把握するには、ラジオの携行が有効です。雷の音が電波を通じて、ラジオに聞こえます。
- ②雨が降り始め、空や川に異変を感じたら、すぐに水辺から離れます。
 - ・上流に降った雨で、急に増水することがあります。
 - ・水かさが増したり、濁ったり、枝などが流れてくる時は危険です。
 - ・岩肌が露出した崖の近くを歩くのは危険です。
 - ・雨が強くて視界が悪い場合、むやみに進むことは危険です。状況を見極めて、行動します。
 - ・雷の場合も水辺から離れます。

○危険への対応

天候の変化や日没への対応

- ①雨具や防寒具、懐中電灯を携行します。
- ②気温が高い時期は、熱中症対策(水分・塩分の補給等)について万全を期します。

山歩き（沢登り含む）への対応

- ①必ず地図を携行し、目印となる看板を確認します。
- ②道に迷った場合、むやみに歩き回らず、来た道をわかる所まで引き返しコースの再確認をします。
- ③歩きにくい場所では、両手を使いながら気を付けて歩きます。
- ④下り坂は危険ですので、走らないようにします。
- ⑤濡れた樹木や岩の上は滑りやすいので、慎重に歩きます。
- ⑥石を落としてしまった場合、大声で「らくー」と叫び下の人に知らせます。
- ⑦危険な木がある場合、すぐに通り抜けるか迂回します。
- ⑧沢登りでは、かかとのある運動靴を履きます。また、靴を濡らして歩きやすいルートを考えながら進みます。

自然の動植物への対応

- ①スズメバチに遭遇した場合、ハチを刺激せず静かにその場所から遠ざかります。
 - ・騒いだり、手で追い払ったりするとハチが興奮します。
 - ・黒いものに寄ってくる習性がありますので、頭部の保護と衣服の色に配慮します。
 - ・ハチ専用の殺虫剤があれば対策に有効です。
- ②万が一、スズメバチに刺された場合、ポイズンリムーバーで毒を吸い出し、傷口を流水で洗浄します。
 - ・口で吸い出してはいけません。
 - ・市販の吸引器（ポイズンリムーバー）やハチ専用の殺虫剤があれば対策に有効です。
 - ・ショック症状が見られた場合は、緊急の対応が必要です。（アナフィラキシーショック）
 - ・応急手当の後、医療機関へ受診をします。
- ③マムシなどに遭遇した場合、なにもせず見過ごします。
 - ・掴んだり、捕まえたりしようとするとう攻撃してきます。
- ④万が一、マムシに咬まれた場合、傷口より心臓に近い部分を止血し、ただちに医療機関を受診します。
 - ・口で毒を吸い出してはいけません。
- ⑤野生動物に遭遇した場合、動物を刺激せず、落ち着いて対処します。
 - ・大きな声を出してはいけません。
 - ・「急」な動きをしてはいけません。
 - ・ゆっくり動き出します。
 - ・目を背けずに距離をとります。
- ⑥有毒なキノコや木の実などの判別には専門的な知識が必要です。口にしないようにします。
 - ・間違っって食べてしまい、嘔吐やけいれんなどの症状が見られた場合は、医療機関を受診します。
 - ・皮膚がかぶれた場合は、抗ヒスタミン剤軟膏を塗ることが有効です。

○班活動への対応

緊急時の班員による連絡体制

- ①緊急時以外、班が離散してはいけません。
- ②緊急時の班員によるチェックポイント指導者への連絡体制を確認します。
 - ア 付き添い者と連絡係に分かれ、怪我などで動けない班員は、その場所に留めます。
 - イ 連絡係は、二人以上で最も近いチェックポイントの指導者に連絡します。
 - ウ チェックポイントの指導者は本部と相談し、その指示を連絡係に伝えます。
 - エ 連絡係は班員のところに戻り指導者の指示を伝え、次の行動を開始します。
- ③帰所時には、必ず本部への報告を徹底します。

本部の役割（引率指導者）

- ①情報の収集・伝達・行動指示および意思決定の一元化を図ります。
- ②チェック表で時系列による班員の所在確認と把握を行います。
- ③帰所の確認および人員点呼、活動終了の指示、チェックポイントの撤収の指示を行います。

チェックポイントの役割（引率指導者）

- 班員の人員点呼、到着時間の確認、健康・安否確認、次のルート指示、本部との連絡調整・伝達、救助・捜索等を行います。
- ・原則として自分の持ち場を離れてはいけません。
 - ・計画された活動の継続が困難な場合、本部との相談により短縮ルートへの変更指示や班員と一緒に帰所する場合があります。
 - ・日没のことも想定し、原則懐中電灯を携行します。
 - ・地図は必ず携行します。

無線機の携行について（引率指導者への貸し出し）

- ①本部開設後、各チェックポイントとの交信状況を確認します。
- ②チェックポイントとの交信が不明瞭な場合、別のチェックポイントが中継し、情報の伝達をします。
- ③チェックポイントから本部への帰所は、本部の指示を受けてからになります。
 - ・帰所するまでは、電源はON状態を保ちます。
- ④捜索等で活動エリアの中に入る場合は、必ず地図と無線機を携行します。